アートミーツケア学会 News+Letter

Vol.1 2007 winter

CONTENTS

特集1 アートとコミュニティ
特集2 アートミーツケア学会設立総会・記念フォーラム報告
リレーエッセイ　メディアアートとアートミーツケア　銅金 裕司
コラム　アートはこころのクスリ① ホスピタル・アートとの出会い　森口 ゆたか
アートとNPO　NPO法人和歌山芸術支援協会WACSS　井上 節子
インフォメーション　イベントのご案内／入会のご案内

Photo:「ひと・アート・まち　おおさか」ごくらく絵本パフォーマンス

アートミーツケア 特集1

アートとコミュニティ

時代が大きく変化し、「アート」の意味や「コミュニティ」のあり方、そしてアートとコミュニティのかかわりあいについて問い直しがはじまっています。単なる参加型のアートではなく、アートによって連なる人たちから生まれる新しい公共のあり方が、これからのコミュニティをつくっていくのではないでしょうか。ここでは、アートによってつくられる価値、コミュニティについて考えます。

アートとコミュニティ―わたしの発端―

中川　真　大阪市立大学文学研究科教授・インドネシア国立芸術大学客員教授

2006年9月末に、大阪市立大学にて「アートとコミュニティ」というシンポジウムを、アートミーツケア学会との共催で開きました。これは、5年間続いたCOE（文部科学省による国際研究教育拠点づくりのプログラム）の締めくくりの一コマでもありました。このシンポジウムには、タイのチュラロンコン大学からチャナロン・ポーンルングロイ学部長、インドネシアの国立芸術大学からスプラプト・スジョノ学長、日本からは富山大学の伊藤裕夫教授、それに私がパネリストとして登場し、それぞれ「障害ある人とのアート共同活動(Art for All)」、「中部ジャワ震災後のアートによる社会貢献」、「浜松市のエスニック・マイノリティ（ブラジル人）のアート運動」、「エイブルアートの可能性」について発表しました。

要点は、何らかの形で社会的弱者になっている人々が、アートというコミュニケーションのツールをもつことによって、コミュニティへの参入が容易になる、その様々な事例を紹介しようというものでした。社会的弱者というのは、文脈によって様々に変化する相対的なものだと思います。ですから一般論としてはいえませんが、私の脳裏にあったのは、ホームレス、入院患者と家族、様々な障害のある人、激甚な災害に遭った被災者、介護施設の老人、戦場の兵士、同性愛者、受刑者・・・。けっこうステレオタイプな列挙ですし、受刑者は果たして弱者なのか、と疑問符が呈せられるかもしれません。それはさておいて、私がたどりつきたい論点は、「排除（エクスクルージョン）から脱し、包摂（インクルージョン）を志向するコミュニティをつくる」には、どうしたらいいのか、ということです。そこにおいてアートの果たせる役割は限りなく大きいのではないかという確信をもっています。それを、事例ごとに丁寧に解き明かしていく必要があると考えています。

さて、私がこのようなテーマに関心をもった、その原点について書いてみたいと思います。1997年ですから、ちょうど10年前のことです。インドネシアのマルク州セラム島に行きました。この島はニューギニアの西方に浮かんでいます。写真集をパラパラとめくっていたら、すごく美しい島だった、という何ともいい加減な理由で行ったのです。海岸沿いの小さな村に滞在したのですが、教会の鐘の音、白い砂浜と椰子の樹、夜になると各家庭から聞こえてくるコーラス。本当に夢のような島でした。

ところが、村長の話を聞いてびっくり。この村は、10年前までは、酔っぱらいとドラッグと犯罪の巣窟で荒れ果てていたというのです。誰も村長になり手がいないので、ブチェ氏は州政府からの命令で村長職につきました。彼は舞踊の振付家だったのです。どうしたら、この村が甦るのか・・。ブチェ氏は考えたあげく、村の歴史を描いた舞踊劇を考案。それを、村人によって上演しようと計画したのでした。当初はいやがる村の青年を力ずくで練習場に連れてきて教えました。何しろ彼は巨体で、反抗すると投げ飛ばされます。いやいや来ていた青年たちは、ブチェ氏の熱心さが功を奏してか、やがて練習にのめり込んでいきます。多くの若者が参加を始めました。それと並行して、村の治安や環境がみるみる改善していったのです。

10年後には、全く見違える村になりました。村の舞踊団はインドネシア全土の芸能大会にてグランプリを獲り、オランダまで海外公演に出かけるほどになってしまったのです。私の滞在中に上演してくれたのですが、実に素晴らしいパフォーマンスでした。アートの力をまざまざと感じました。ここでの体験が、いまの私の関心を駆り立てているのです。日本でも可能ではないか、と。

なかがわ・しん／東南アジアの民族音楽、サウンドスケープ、サウンドアートを研究する。ガムラングループ「マルガサリ」を主宰、国内外での公演を実施。2004年からエイブルアート・オンステージに取り組み、『さあ、トーマス』を上演。

2007年3月25日(日）にザ・フェニックスホール（大阪市）にて、共同性をテーマに、「ガムラン・コモンズ―音楽の新たな領野　フォーラム『ガムランの現在と未来』＆コンサート」を開催します。鈴木昭男（サウンドアーティスト）、三輪眞弘（作曲家）、ラハルジョ（作曲家）、マルガ・サリの演奏によるコンサートと、ガムランの古典性と今後の新たな創造性について語り合うフォーラムを行います。http://www.margasari.com/

「障害者アートとまちづくり」から「あたらしい関係づくり」へ

～「ひと・アート・まち」の取り組み～

岡部 太郎　ひと・アート・まち事務局／財団法人たんぽぽの家

エイブル・アート・ムーブメントは新しい時代にふさわしい文化を市民の手でつくっていこう、という運動である。既存の権威や常識にとらわれず、今を生きる人たちが共感できる文化を「アート」を切り口に提案している。主役は、社会的に弱い立場にいる人たちだ。

関係性をかえる

障害のある人たちの表現は、見る人の心の底に素直に響き、忘れていた深い感動を呼んだ。国内でも10年ほど前から、障害のある人の作品が各地で展覧会やワークショップが開催されるようになった。しかし「芸術」そのものが世間の人たちにとって高尚で近寄りがたいイメージがあるのは変わりがなかった。まちのなかで障害のある人たちの優れた作品を見せること、これがアートに対するイメージ、障害のある人に対するイメージを変え、またそういういった「他者」を受け入れるまちの様相も変えるのではないか。関わる人たちがそんな思いを募らせる中、「ひと・アート・まち」プロジェクトははじまった。

「ひと・アート・まち」は、近畿労働金庫が財団法人たんぽぽの家と協働ですすめているコミュニティ・アートプロジェクトである。この6年間、近畿2府4県で障害のある人の展覧会をはじめ、コンサートやワークショップ、まちづくりを考えるフォーラムなどを各地で開催してきた。

メインテーマであった「障害のある人の表現」は、年を重ねるごとに発展していった。作品そのものから、作者である障害のある人の「存在そのもの」へと視点は広がっていった。大阪では「語りえぬもの」というテーマで、アートに対する既成概念を問い直すプログラムを実施した。そして、現在では障害のある人とアーティストが一定期間協働で創作活動をする「エイブル・アート・リンク」プロジェクトに至っている。作品そのものだけではなく、出会いのプロセスや創作以外の出来事も、ひとつの物語になる。

まちを彩る仕掛け―コミュニティプロジェクト―

こういった一連の流れのなかで、平行して取り組んだのが、コミュニティの中でのアートの役割を模索することだった。

「世間遺産」という風変わりなネーミングのプログラムを和歌山で企画した。ちょうど和歌山の熊野古道が「世界」遺産に認定された時期である。地元のNPO「和歌山芸術文化支援協会(wacss)」が、地域の写真家とともに開催していた子ども対象の写真ワークショップがあった。そこに「100年後の子どもたちに残したい風景を公募によって集める」という私たちのコンセプトとをリンクさせ、「世間遺産」へと展開した。ワークショップでの作品も含め、集まった写真は約1,000枚。会場に展示された大量の「世間遺産」たちは、新しい和歌山の姿をみせてくれた。

撮られた人も見に来る「世間遺産」

プライベート美術館

「プライベート美術館」は滋賀ではじまったプログラムだ。障害のある人たちの作品を、個人の家や商店に一定期間展示してもらい、返却後に借り手のメッセージとともに再び会場で展示をした。作品の選定は「お見合い」と称するプレ展覧会を開催し、借り手が気に入った作品をそのまま持ち帰ってもらう。展示後の反応はさまざまで、「作者に会いたい」「もっと長期間借りたい」「作品を購入したい」などの声があがった。実際に作者が展示場所を訪れたり、最終的に作品を購入した商店もあった。

プロジェクト後に根付く「まちづくりの種」

「ひと・アート・まち」の大きな特徴は、毎年各地を回る巡回型プロジェクトである、ということだ。私たち事務局は、その土地で活動している人たち、または何かまちづくりに関わりたい、と思っている人たちと協働でプロジェクトをすすめていく。そのなかでお互いが学び、成長する。プロジェクト終了後、地元の人たちが再び集まり、各地で継続的な取り組みが続くこともある。例えば、京都で開催した「視覚障害のある人たちとの鑑賞ワークショップ」が、その後も継続した取り組みとなった。兵庫では地元の商店街・アートNPOなどがまちを舞台にしたアートプロジェクトを毎年開催している。いずれも障害のある人の作品に触れたことが発端となっているが、その後の広がりはそれぞれのコミュニティ独自の動きが見られる。「ひと・アート・まち」は今後もコミュニティのなかでさまざまな物語を生み出していくだろう。

おかべ・たろう／財団法人たんぽぽの家スタッフ。主にエイブル・アート・ムーブメントに関わり、展覧会やワークショップ、舞台などの企画を展開している。

Interview

表現の場をつくり、アートの価値を提案するNPO

上田假奈代さん
NPO法人こえとことばとこころの部屋代表

うえだ・かなよ／3歳から詩作、17歳から朗読をはじめる。92年から障害のある人や社会人、子ども対象の詩のワークショップを行い、01年「詩業家宣言」を行う。03年新世界フェスティバルゲートにココルームを立ち上げ、04年NPO法人こえとことばとこころの部屋を設立。「表現と自立と仕事と社会」をテーマに障害のある人やホームレスの活動支援、仕事についての語り合い、表現を通じて「自律と創造力」を活性化する社会をめざす。

ココルームの入口。ぽえ犬くんが目印。

通天閣がある大阪・新世界にあるフェスティバルゲートの4階に「就労支援カフェココルーム」がある。2003年4月に大阪市より新世界アーツパーク事業の管理委託をうけてスタートし、2004年にNPO法人を取得した。隣接する西成区のホームレス問題に関わったり、ニート・引きこもりとよばれる人たちと就労について考える事業や、若手アーティストの支援を行うなど、ココルームの活動は多様であり、日々さまざまな人が夜遅くまで行き来する。多様な人が出会う場をつくる上田假奈代さんにお話を伺った。

居場所としてのパブリックなスペースから表現が生まれる

ココルームには、社会的な問題や精神的な問題を抱えた人が来ることもあるが、誰であっても人を選ばず、拒まない。ココルームは何かを表現したいと考える人を支援する場であると同時に、居場所としてのフリースペースなのだ。

上田さんは、この取り組みをはじめる前、京都でコピーライターの仕事をしながら、詩の活動を行ってきた。そのとき住んでいた部屋は25畳1ルーム。その広さをいかして、ワークショップやイベントを企画したり、部屋をアーティストに貸すこともあった。いろんな人が出入りしたが、なぜか心の病をかかえた人や問題をかかえた人から悩みが持ち込まれることも多く、そのときの経験から、誰かの悩みを受け入れても引きずらずに整理する方法もだいぶ身についた。「今、ココルームにはさまざまな人が訪れるが、問題がある人が来ても、問題があるんだなと思うだけ。そのまま受けとめる。いろいろな人がいることが当り前だから、ここが居場所の一つになればと思う。はらっぱみたいなコミュニティがあればいい」と上田さんは言う。

ココルームでは、訪れる人の話を聴き、一緒にごはんを食べることもある。そんなことを繰り返すなかから、その人のやりたいこと、表現を支援することも自然にはじまった。身体障害を持つ人たちが声や言葉でパフォーマンスを行う「ほうきぼしプロジェクト」や、ホームレスや生活保護を受けている人たちの表現を通した自立支援事業「むすびプロジェクト」もここから生まれた。人と人が出会い、かかわりあう場をつくると、次の新しい表現が生まれている。

毎日のようにワークショップやフォーラム、ライブなどが行われる。昼間は「お昼寝（毛布付き）300円」を利用する人も。

表現と仕事と社会のかかわりを探る

「他の仕事をしてみて、やっぱり詩を朗読したい、詩を集中してやろうと思った。詩人として仕事をするには、社会と向き合う態度や表現者としての姿勢が大切」。上田さんは、2001年に詩業家宣言をしたときから、「表現と仕事と社会」をテーマに取りくんでいる。

アートを仕事にしたいと考える若者、効率化を重視する社会のなかで社会になじめずに生きづらさを抱える人たち、ココルームに集う人たちと向き合うなかで、現代社会が抱える問題も見えてきた。だからこそ、1人ひとりの問題にていねいに向き合うことから、社会の問題を解決する糸口もみつかるのではないかと考えている。そこに集う人たちがみんなで智恵を出し、対話し、想像力を働かせ、他者の問題も自分のこととして考えるときに、集う人たち自身も生きる技術を学ぶことができ、問題を解決するダイナミズムが生まれる。

生きていくこととは、仕事にかかわることであり、人とかかわることであり、社会とかかわることである。表現は生きる力を養い、アートは支えあいのコミュニティをつくる可能性をもっている。ココルームという場の実践は、今の社会のなかの大きな実験である。

（まとめ：森下静香）

2007年2月24日（土）にフェスティバルゲート3FのArt Theater dBにて「全国アートNPOフォーラム in フェスゲ！ー新★世界的公共の実践」が開催されます。「フェスティバルゲートをひらくための最前線戦術」をテーマに社会におけるアートNPOの役割を探ります。詳しくはアートNPOリンク事務局まで。
http://arts-npo.org

アートミーツケア 特集2

アートミーツケア学会設立総会 記念フォーラム報告

2006年3月11、12日に、奈良県新公会堂にてアートミーツケア学会設立総会、記念フォーラムを開催しました。当日は全国から約200人が参加し、ケアとの出会いから生まれる新しいアートのあり方、社会におけるアートの可能性、そして人間の生きる力を支える創造性について考えました。
この特集では、15年にわたりアメリカ・アーツ・イン・ヘルスケア学会を牽引してきたリン・ケイブルさんの講演、ケアの文化やコミュニティのあり方を問い続けてきた佐藤登美さんの講演、そして学会員の山田隼史さんによるレポートをお届けします。

記念講演1

現代におけるアートの役割

――アメリカ・アーツ・イン・ヘルスケア学会の果たしてきた役割――

リン・ケイブル　Lynn Kable　アメリカ・アーツ・イン・ヘルスケア学会元会長

「care」とは何か

「care」という言葉にはさまざまな意味がありますが、アメリカでは「care」という場合、大きく分けて3つの意味が考えられます。1つ目は、「care about」という言い方です。これは誰か、あるいは何かに興味・関心を持ち、気遣いをするという意味になります。

2つ目は「care for」という言い方です。これは誰かの世話をする、保護をする、面倒を見る、看護する、支援する、見守るという意味です。

3つ目は、「have a care」という言い方です。これは、心の苦しみや偏見、不確実さ、不安などが混ざり合って心に重くのしかかっている状態を取り除いてあげるということです。

アートや文化、デザインをヘルスケアの現場に取り入れていくことは、私たちが生や病気、障害、死について新しい考え方を見い出したり、これまでの考え方を見直すことであり、それを通して「care」について考えることにつながります。アートは、患者や家族、ケアする人に安心感や支えをもたらす方法を提供できるのです。

ヘルスケアの現場におけるアートの広がり

アメリカ・アーツ・イン・ヘルスケア学会（SAH：Society for the Arts in Healthcare）は、1991年に設立されました。当初は小さな団体で、会員は病院でアートや文化のプログラムを行っている人たちが中心でした。現在では会員は1,600人以上になり、アーティスト、アートセラピスト、アートマネージャー、デザイナー、また病院経営者や、医師、看護師、そして国家レベルから地方行政の政府団体代表者等も含まれています。2004年に、SAHが行ったヘルスケアの現場におけるアートの導入の調査によると、アメリカの2,000以上のヘルスケアの現場で、アートが何らかのかたちで行われているということでした。この2,000以上というのは、調査に回答してくれた医療機関の50％以上の数になります。

ヘルスケアの現場にアートやデザインを組み込むことの必要性は、それぞれの時代や状況に応じて認知され、広がってきました。たとえば、1960年代の病院というのは近代的な建物でしたが、そのような建物ではどの階も同じデザインがされていたため、病院のスタッフや患者はエレベーターから出た瞬間、自分が今一体何階にいるのか全く分からなくなるという状況がありました。後にワシントンD.C.にある病院で、SAHの学会会員だったヘレン・オーレム（Helen Orem）が依頼を受け大きなアート作品を購入し、それを各階の道しるべとして、なおかつ病院内が芸術的で美しくなるように展示しました。

また、1980年代になると、ホームレスの問題が大きくクローズアップされてきました。特にニューヨークのハーレムでは、多くのホームレスたちが特別な場所に集められ、そこを住居としていましたが、その人たちは精神障害や薬物依存、アルコール依存の治療も必要としており、1,500人もの人がそこで治療を受けていました。
それを知ったアーティストやデザイナーは、「このままではいけない。患者やホームレスの一人ひとりがケアされている、大切にされていると感じられるような状況を作っていくことが必要だ」と感じ、ホスピタル・オーディエンス（Hospital Audiences, Inc.）という団体とともにシェルターの改善に乗り出しました。

医療におけるアートの役割

SAHの会員は、医療の現場においてさまざまなアートプログラムを実施しています。たとえば、デューク大学メディカルセンターで行われている音楽プログラムでは、ミュージシャンが患者のベッドのそばで音楽を奏でることによって患者に安らぎを与えます。音楽を聞くことで、患者はイエス・ノーの意思表示がよりはっきりとできるようになるという効用もみられるようです。

デューク大学メディカルセンター（ノースカロライナ州）

フロリダ大学医学部では「将来医療に携わるものにとって、アートと笑いの２つが癒しという点で非常に重要になる」という考えから、学生に対してアートプログラムが行われています。
また、フロリダ大学シャンズ病院では、「ケアする人のケア」プログラムとして、看護師がヨガや瞑想、自己マッサージを習うことで、リラックスすることを学ぶプログラムが行われています。近年このようなプログラムがケアする人のストレスをやわらげ、離職率を下げることの効果が認められはじめてきています。

アートを通して病院で癒しの環境を作り出しているということが、これからの各病院の評価の重要な項目になるだろうといわれています。

ジョージタウン大学メディカルセンター（ワシントンD.C.）

災害とアート

2001年９月11日、ワールド・トレード・センターが攻撃され、ニューヨークの人々は非常に大きなトラウマをもちました。人々は大きな無力感を感じ、自分ではコントロールできないことの多さに打ちのめされました。そして、そのときに多くの人が感じたのは、アートの持つ癒しの力でした。

ルイジアナ州でもハリケーン・カトリーナにより被災した１万5,000人のために、ビジュアルアートや演劇などのプロジェクトが行われました。カトリーナの被災者の人々が住んでいたシェルターでは、赤十字の人たちがいろいろな医療活動をしていましたが、彼らはこうしたアート活動を見て「赤十字は医療面でのニーズは満たしているが、アートはまさに精神面でのニーズを満たしている」と言ってくれました。そして、赤十字は今後、被災直後に行う支援の一つにアートを使った支援を加えました。

私が初めて日本に来たのは、阪神淡路大震災後の1997年です。その後、アジアでは津波があり、アメリカではハリケーンがありました。そういった悲惨な出来事は常に世界中のどこかで起き、それに伴って人々は心にダメージを受けます。そのダメージ、トラウマをいかにサポートしていくかということが重要です。

私たち現代人が癒しを求めるとき、過去のやり方に学ぶことができるのではないでしょうか。つまり、癒しとは神話や詩のなかにある精神性、また演劇や物語、ビジュアルアート、音楽、そして庭、ダンスなどのさまざまなメディアから得られるのです。

私は今まで、「『ケアする人のケア』日米共同プロジェクト」をはじめ、さまざまなプロジェクトを通して日本との交流を続けてきました。みなさんが日本で行われているこの活動、努力は、アメリカにいる私たちにとっても非常に大きな励みになっています。

フロリダ大学シャンズ病院。患者や家族、病院スタッフなどがワークショップで制作したタイルでできた壁画。希望や平和、ケアなどをテーマにしている。

リン・ケイプル／ニューヨークにあるNPO、ホスピタル・オーディエンスで病院や老人ホーム、精神科などさまざまな場で公演やワークショップを行う。ホームレスや薬物依存の人たちに対しての教育プログラムなどにも取り組む。アメリカ・アーツ・イン・ヘルスケア学会の設立に携わる。

記念講演2

ケアの文化のあるコミュニティづくり

佐藤 登美　静岡県立大学看護学部教授／大学院看護学研究科長

ケアの源流

ケアというのは弱かったり、未熟だったり、力がなかったりということが基盤にあって生まれてきたものではないかと考えています。

ケアの原初的なかたちをたどっていくと、狩猟採集時代、つまり人間が二本足で歩きはじめたころにさかのぼります。我々の先祖はチンパンジーやゴリラのように二本足で歩けるようになると、森を出て平原へ行き、湖沼のあるところなどで群れて生活するようになります。

しかし、人間はなぜ群れて暮らすようになったのでしょうか。人間という種を考えてみると、ことさら目がいいわけでもなく、足が速いわけでもなく、コウモリのように耳がいいわけでもなく、猫のように鼻がいいわけでもありません。種として見ると、人間はどちらかというと身体能力が低く、弱いのです。しかも猫などは生まれて20分ぐらいで歩き出しますが、人間は生まれてそのまま放っておくと死んでしまうような未熟な状態で生まれます。そこで、人間にはどうしても「助け合う」ということが必要だったのです。ですから、「弱い」あるいは「未熟」ということは、ケアにとって非常に重要なキーワードだと私は考えます。

つまり、弱いところを見捨てなかったところから、あるいは弱いところを補完するために、いろいろな智恵や手段が生まれてきました。例えば、今のように科学的な方法で病気が治るということが分かっていなかった時代、誰かが「痛い」と言えばほかの人間がその周りに寄ってきて、「痛いか、痛いか」と言ったでしょう。そして、血が出ていたり、腫れていたり、熱が出ていたりすれば、そのそばに寄っていった人間は、どんなふうになると痛いのだろうと手を当ててみたりしたのです。手を当てて、つまり、相手の身になって考え、感じようとしたたわけです。おそらく、そういうところから、精神性というもの――今でいう心が生まれてきたのだと思います。

「測る」ことと「感じる」こと

今の「看護」というものを考えると、「感じる」よりも「測る」ことが中心になっています。「測る」ことで人を理解して、そこから必要な援助をしようという考え方です。そして、ケアの原初的な形態の中にあった、感じるということは、少なくなってしまいました。

たとえば、入院するとまず、体温を測られる。また、血圧を測られ、脈も取られる。さらには心電図を取る。心電図で駄目ならMRI（磁気共鳴画像）を取る。あるいは、CT（コンピューター断層撮影）、CTで駄目ならPET（陽電子放出型断層撮影）というふうに、測ることでもって相手（の悪いところ）を理解しようとする。

今では、体の中で具合の悪いところは、小さいものでもPETによって見つかってしまいます。そして、それを根こそぎ取ります。切除しても駄目なら、今度は薬で焼きます。薬で焼いても、たたいても駄目なら、放射線で照射して、被爆させて殺します。徹底的に測ることを通して、病気の原因を捕まえ、そこを取ってしまおう、なきものにしてしまおうというやり方です。

スーザン・ソンタグ（Susan Sontag）というアメリカ人の作家は、医療用語や治療用語には、戦争用語がたくさんあるといいました。確かに、放射線で焼く、薬でたたく、すべて戦略用語ですよね。

いのちが心地よく生きていけるように コーディネートしていく

しかしながら、弱い相手が何か手伝いを必要としているときに、「測る」ことを根拠としてはじまる行動と、「感じる」ことを根拠にしてはじまる行動とでは決定的に違うのです。「測る」ことというのは、どちらかというとcureに近い対応ですし、「感じる」ことというのはもともとのcareの本質であったと思います。そして、「感じる」ことを根拠にし表現していることといえば、実は芸術はすべてそうなのです。計算して描いても、絵はなかなか美しくはなりません。

私は30歳になってからナースになりましたが、そのころ、技術的にもトレーニングを積んで、しかも達人の域に達しているような、とても優しい看護師がいました。患者さんに向き合うときの格好、声をかけるときのかけ方、そばに近づいていくときの近づき方がムダがなくきれいなのです。下手な人は、パタパタと「行くぞ、行くぞ」という感じがします。上手な人は「あなた、どこが痛いの」と患者さんの痛いところにスーッと手を伸ばしていきます。その伸ばし方がきれいなのです。

今の看護師には、手を引っ込めてデータを見て、「血液ガスがこれだから、苦しいといってもそれほどではありませんね」という目つきで、さらに測ろうとする人もいます。しかし、昔、私がなりたてのころにいた上手な看護師は、患者さんのそばへ行くときに、相手のために時間を使うという感じでスーッと入っていくのです。別にカウンセリングの技術を勉強しているわけでも、面接の技術を練習しているわけでもありません。それは相手が痛いということに対して自分の気持ちを持っていくときに、体もそういうふうに自然に動いていく、それが動きとしてきれいなのです。

しかし、熟練した看護師だけがそんなふうに「きれいだな」と思わせるかというとそうでもなく、新人にも少なくありません。感じたことがそのまま行為になるときには、きれいです。よいケアのなかには、アートが含まれています。

要するに、感じたところを根拠にしてはじまらなければ、

ケアもアートもなりたちません。命が心地よく生きていけるようにコーディネートしていくことがケアであり、アートだと思うわけです。

ケアの文化のあるコミュニティづくり

今、コミュニティにおける人間関係は非常に希薄になってきました。希薄になった理由はいろいろあります。コンビニエンスストアがあれば生活できる。技術が進み生活が便利になって、昔のようにみんなで手伝い合いながらやっていくことは必要でなくなったのです。ですから、コミュニティはどんどん渇いてきます。しかし、ほんのちょっとしたこと――つまり、ケア的な関係やコミュニケーションがあれば、地域はまたみずみずしいものになっていくでしょう。そのためには、人に対して関心を持ち、何かほんのちょっとしたことでも感じてみるということが大切です。

あるいはまた、社会的な仕掛けも必要です。そして、その社会的な仕掛けの一つに、感じやすさを回復するという意味で、そのプロセスで、アートが果たす役割は大きいのではないかと思います。

また、私たち人間が生きている、命を持っているということには限界があるということを、どこかでしっかりと知っていることが重要です。私は、アートというのも、命に対する限界性が根拠にあって生まれていると思っています。命が1回しかないものであるということ、限られているということが一番根っこにあることで、絵や詩や音楽が生まれてきているのです。ケアもまた、「弱さ」や「生きるということには限界がある」ということを根拠にしてはじまった行為でした。

現代人が“いのちをとりもどす”とき

私は、病気になったときが命を取り戻すときだと思っています。元気なときには命を取り戻す必要はありません。元気な人は競争社会、市場主義の中で、ばたばたと働いているのですから、関心が生命に向けられることは少ないのです。どこか具合が悪くなったときに、人間というのは感じやすくなるのです。

元気で、お金もそこそこあって、コンビニが近いところにあると、人間は命を取り戻すなどということは考えません。ところが入院してみてあちらこちらが悪いと言われ、インフォームド・コンセントで病気の説明を受けたりすると、皆が来し方を振り返り行く末を思って、「私の一生は何だったのか」と考えます。いのちをとりもどすときは病気になったときと思い、もしも具合が悪くなって入院することがあったら、そのことを思い出していただければと思います。

私は病気になることを否定的に考えていませんし、病気になったら終わりだという社会のあり方を変えていかなくてはいけないのではないかと思っています。

さとう・とみ／浜松市で1983年から1994年「ひろ～く“間柄づくり”をめざす研究会」という在宅ケアのためのボランティア活動を展開。著書『ケアの本質を探る――佐藤登美対談』（メヂカルフレンド社）では、現代社会のなかでのケアの働きについてさまざまな人と対談している。

Report

山田 隼史　京都大学理学部地球惑星科学専攻

「ケアとの出会いから生まれる新しいアートのあり方、社会におけるアートの可能性、人間の生きる力を支える創造性」などについて考える非常に良い場であった。

まず、私は「アート」側の人間でも「ケア」側の人間でもない。そういう意味でも、席上に参加した多くの人々とは違った印象を持ったかもしれない。

一日目の挨拶の場で、畑祥雄氏（学会副会長）は「これまでの芸術は政治・経済と対抗する形をとってきたのが常でした。しかし、これからは社会のさまざまな問題に対して、解決策を提示できるようなアートのあり方を模索していきたい」と話した。畑氏の話を聞きながら、この学会が非常に価値のある、歴史的なことに挑戦していこうとしていることを感じるとともに、改めてこの学会が目指そうとしているビジョンに感銘を受けた。

特に私が印象的だったのが、1日目の記念講演と2日目の実践報告。佐藤登美教授の話は、ケア現場の最前線で生きてきた人の生の声で、さまざまに感じさせられることがあった。佐藤氏は「人間のやれることには限界がある、ということをよく知っておく必要がある」と話していたが、まさにその通りだと思った。それは科学の面からもいえることであり、これほど科学が洗練されてきた時代にあっても、人類は自然界に存在しない全く新しい種を、たったの一種さえも創造できない。アートに携わる人も、このような観についてよく吟味してみる必要があるだろう。こういった観は分野の違いに関係なく、人として共有できる部分だろうから。

2日目の実践報告では社会におけるアートのあり方を私たちに見せてくれた。もちろん、それぞれの活動自体はまだまだこれからというところ実状だろう。しかし、例えば「ホスピタル・アート」について発表した森口ゆたか氏のように、なかなか病院に受け入れられなくても信念を持って活動する姿には、心打たれるものがあった。価値観が多様化した現代だからこそ、それぞれに行くべき方向を示唆してくれる「良心の叫び」を、各人が大切にしなければならない。良心の叫びを「貴」なるものとした人々が社会を変革し、歴史をよりよい方向へ導いてきたことを考えれば、この奈良から新しいアートの歴史が始まるのかもしれない、とワクワクさせられるものがあった。

また、美術の授業で中学生に道徳についても教育している神吉脩氏の話は、私にとって目から鱗だった。神吉氏は2つの重要なことを中学生に実感を持って教えていた。1つは、純粋に「つくる」ことの喜びについて。そして、もう1つは「つくる」という行為を自分のためではなく「誰かのため」に行うことで、人のために何かをすることの喜びを実感させていた。現代社会にも通用するアートの可能性を垣間見ることができた。

総じて、非常に充実した二日間だったが、すべてに満足だったというわけではない。様々な分野の人々が集まっているゆえの摩擦もあるだろうが、自己満足になることのないように、今の社会が失ってしまった「良心」を取り戻すアートのあり方を模索してほしい。

やまだ・としふみ／アートの力で「人として大切なもの」を個々人や社会が取り戻していけるように病院や小学校で活動しているサークル「WITH」の代表。

リレーエッセイ

メディアアートとアートミーツケア

銅金 裕司　メディアアーティスト／東京藝術大学美術学部先端芸術表現科非常勤講師

アートとはどのようなものかを長年考えて来ましたが、私の場合「花」や「自然」それへの人の係わり、すなわち広義のアルテ（人為）、技術もテーマです。俗にいうアーティストで「花」を描かなかった人はいない、とほぼ断言できるのではないでしょうか？　ということで、花はアートである、と考えて、「花とは何か？」が、花というメディアが重要なテーマです。

そこで、私のアーティストとしての試みはあるいはこれまでの作品は「植物」・「機械」・「音楽」で総括でき、そのような制作物を美術館、ギャラリーで発表しています。そのなかに、花や緑を使ったワークショップあるいは作品として「ガーデンシアター」というものがあります。このワークショップは、もう10年以上続けてきており、数百人の詳細かつ膨大な記録をとっていますが、まだ、まったく解析できていないという状態で、怠慢のそしりは免れないと思っています。

ガーデンシアターというアート

昨年、共同通信によって、以下のような内容が全国各紙に掲載されました。そこでまずは、その引用から。執筆は共同通信主筆の井出和子さんです。

・・・「まるで幼稚園のころに返ったみたい」。七、八人のグループに分かれた学生さんが、夢中で箱の中に小さな自然の世界を作っていました。学生といっても全員六十五歳以上。神戸市シルバーカレッジの授業風景です。箱の中をのぞいてみましょう。

土を置いた上にコケがしきつめられ、田園の緑が広がっています。そこに小さなスギの枝をさせば林の出来上がり。畑には作物が育っていますが、柵をこわしてイノシシの親子が荒らしにきています。柵は竹串、作物は発芽して四日目の青ジソの芽、動物は手作りの焼き物です。そしてもう一つ、となりの箱にはコイの泳ぐ池や茶室のある日本庭園がつくられていました。箱の中の庭園や自然の風景を箱庭といいます。

なごみのヒント「生命の析出する海辺Ⅲ」
2000年6月　兵庫県立近代美術館

でも、アーティストの銅金裕司さんが講師を務めるこの園芸の授業ではガーデンシアター、つまり庭園劇場と呼んでいます。というのも、この授業は、箱庭をつくっただけでは終わりません。完成した後、作品にまつわる物語が語られるのです。二つの箱にはどんな物語があるのでしょう。この作品は、実際に畑をイノシシに荒らされた経験から生まれたそうです。「人間は一生懸命努力して育てた作物をけものたちに横取りされると腹が立つ。なので、腹が立ったら、もう一つの日本庭園に来て心をなごませましょう」。一つ目の箱庭には畑をあらされたくやしい気持ち、二つ目の箱庭には、それをいやす気持ちがこめられているのです。

福祉施設のスタッフに対しての研修としてのワークショップ。
「箱庭から生まれる物語」をテーマに制作したあと、一人ずつ物語を語る。

銅金さんはものをつくることの大切さを次のように言います。「日ごろから自分らしいものは何かを考えて、箱庭などのものを作り続けていると、困難に出合ったとき、自分らしい一歩をふみ出すことができる。その心のあり方が、あたえられる『いやし』ではなく、みずから創造する独自な『いやし』を生み出すのです」。腹が立つ気持ちを形にすることで、一方的にイノシシを責める気持ちが変化し、日本庭園といういやしの空間をつくることにつながった。畑を荒らされた人々はグループの仲間や自分の心と対話しながら、安らかな世界にたどりついたのではないでしょうか。

井出さん、どうもありがとうございました。このガーデンシアターというアートですが、これは、それぞれの個人の個性を実現するにむけて、癒し、回復する可能性を探る、程度のものです。そう、癒し、という病の回復にはどう寄与できるかは、まだまだです。個人の個性化を通じて、ガーデンと劇場というアーティスティックな試みを続けることで、自ずから癒される、というのはあるかも知れない、と思いますが、日暮れて道遠し、と感じます。

どうがね・ゆうじ／海洋学をおさめた後、園芸に転向し千葉大学大学院修了、工学修士（海洋学）、学術博士（園芸学）。その後、学術的な試みに挑戦しつつ、メディアアートで美術館、ギャラリーなどで作品展示、ワークショップを行っている。作品とコンセプトについては、http://wiki.livedoor.jp/dogane。

非常にポジティブな老若男女が集まる市民大学「シブヤ大学」にて、連続レクチャー「植物共生のススメ」を実施しています。毎月第2土曜日開催。シブヤ大学のＨＰでご確認ください。http://www.shibuya-univ.net/

アートはこころの“クスリ”①

ホスピタル・アートとの出会い

この連載では、病院とアートをつなぐ取り組みを行っている森口ゆたかさんに4回にわたり、ホスピタルアートの実践を紹介していただきます。

森口 ゆたか　造形作家／NPO法人アーツプロジェクト代表

1998年、イギリスのマンチェスターにあるメトロポリタン美術大学に於いて、病院や福祉施設の療養環境をアートの力で改善しようという趣旨のもと、世界２６カ国から５００名以上が集まって１週間という期間を費やして「CHARTS’ 99」というタイトルの世界的シンポジウムが開催された。参加者の職種は多様で、医師、看護師をはじめとする医療従事者、病院経営者、アーティスト、デザイナー、建築家、その他数え切れない分野の人々が参加した。

基調講演を行ったのは、アメリカの医師でありクリニクラウンとしても有名なパッチ・アダムス氏だった。日本では「癒しの医師」的な穏やかで明るいイメージが持たれている氏は、実際には非常にラディカルな社会活動家であるのが氏の講演内容から理解できた。夫の研究に付き添い1998〜9年までマンチェスターに滞在していた私は、たまたまこの世界的なイベントに関わり、日本からの参加者とこのシンポジウムの主催者である「ARTS for HEALTH」 を繋ぐコーディネーター役を務めることとなった。日本では現代美術の作家として、画廊や美術館のみが発表の場であった私にとって、このシンポジウムで世界中のありとあらゆる人たちと出会い、語り合い、医療の現場に於いてアートがこれほどまでに希求されていることを知ったのは驚きであり、アートの新たなる可能性を指し示してくれるものとなった。

１週間にわたるシンポジウムの後、日本からの使節団の人々とロンドンやマンチェスターの病院や施設を見学して廻った。ロンドンでは、どちらかと言うと労働者階級の人々が住む地域に立つチェルシー・アンド・ウェストミンスター病院を訪ねた。特筆すべきなのは、この病院内には何とアート・オフィスが存在し、常駐の学芸員が病院からお給料を貰って

３人も働いていることだった。

主任学芸員の言によれば、この地域に住む人たちは放っておいたら一生美術館とも画廊とも縁のない人々が多い、だからこそ彼らが足を運ばざるを得ない病院という場にアートを存在させてアートの素晴らしさを肌で感じて貰うことが大切なのだ、と病院でのアートが芸術の啓蒙的意味合いもあるのを教えてくれた。実際この病院に来ると、絵画や彫刻などの視覚芸術のみならず、音楽や演劇といった幅広い種類のアートが無料で享受できるのだ。

それ故に病院内の吹き抜け空間にモダン・アートが飾られたカフェテリアはいつも近隣のオフィスワーカーたちで一杯である。アートの力によって、病院という場が「訪れざるを得ない場所」から「訪れてみたい場所」に変化していることを目の当たりにして衝撃を覚えた。このような場所なら、時間のある時に少し気になるところをチェックしてもらおう、と気軽に検査を受ける気にもなるだろう。

この他にも、この視察旅行で印象に残っているのは、マンチェスターにある「START」というNPOで、精神病院への入退院を繰り返す人々をアートの力によって精神病院に帰さないことを目的として活動している。代表自身がアーティストだが、だだっ広いアトリエ・スペースに、アーティストと精神障害者が共存して制作している。初めて訪れた私たちには一体誰が障害のある人で誰がアーティストなのかを区別することは非常に難しかった。

日本の限られたアートの世界だけで生きてきた私にとって、このイギリスでの経験はアートの無限の可能性への扉を開いてくれる第一歩となった。

もりぐち・ゆたか／造形作家として発表を続ける一方、芸術療法とは異なる医療と芸術の関りに可能性を見出し、アートの力で医療環境をより癒しの空間とすることを目的とするアーツプロジェクトを立ち上げる。

シリーズ　アートとNPO

アートはひとやまちを元気にする

井上 節子　NPO法人和歌山芸術文化支援協会（wacss）理事長

私たちが小さかった頃、それぞれの自由な自己表現が今に比べ溢れていたように思います。私自身美術や音楽が苦手でしたが、自分にしかできない自己表現を先生や周りの人たちは認めてくれていました。今、特に教育現場ではどんどんそれぞれの個の特性、自己表現の場や機会が少なくなっています。皆と同じでないとはじき出される、心が望む事に耳を傾けられず空回りしているのでなないでしょうか。

アートは感動する心、夢をみる力を育ててくれます。それは特別なものでなく全ての人たちに平等に与えられています。そしてアーティトは、私たちが日頃見過していた事、忘れていた物への気づきや思いもかけない発想を引き出してくれます。

「アーティトと共にアートに身近に触れる機会を多くつくり、創造する楽しさ、感動の共有を体験してほしい。楽しく元気な人たちがまちを元気にしていく」。そんな思いで5年前から活動をはじめました。和歌山県立近代美術館と協働で、展覧会やワークショップ、学校や教会での地域音楽交流会、子どもたちがカメラを通じて自分たちのまちを歩いて、探して発見するワークショップなど、さまざまな事業に取り組んできました。

第5回ドキドキ千日前編

ひとつの事業をつくっていくプロセスがとても大切で、そんな中で出会った確かな感動という奇跡が次の進化へと繋がります。大人を拒む一人の少女とアーティスト・イン・レジデンス事業で出会いました。自分の環境や将来のことで悩み続けていた彼女は今、私たちの活動を支えるひとりです。きっと彼女はアートとの出会いを自分なりに昇華させ次へと繋げてくれるでしょう。「成績」ではない「生跡」、自己を表現する大切さを子どもたちから教わっています。

いのうえ・せつこ／和歌山放送事業センターを退社後、フリーランス。となり、ミュージカル、コンサートなどのプロデュース・マネージメントに携わる。「アートはひとやまちを元気にする」をコンセプトに2001年にwacssを設立。

Information

From　NPO法人彩都メディア図書館

大阪の万博公園にある彩都メディア図書館は、写真を中心に映像・美術・デザインなどアートに精通した約27,000点の資料を所蔵、一般公開しています。公立図書館や一般書店では入手が難しい海外の貴重書など独自の視点でセレクト。文化普及事業として、体系的に写真を学べる「写真表現大学」を運営し、メディア表現の集積地としてのライブラリーを目指し、社会へ貢献しています。

2007年4月、IMI school総合映像コース、開講！

進化する視覚を創る。彩都メディア図書館は、2007年4月に「文章を書くように、映像をつづる」ことが可能となる新しいカリキュラムをスタートします。2月から3月に説明会を開催します。

写真表現大学第18期修了展

会期：2007年3月5日（月）〜3月11日（日）
会場：海岸通ギャラリーCASO

アートの本棚

図書館では、毎回テーマを決めて蔵書をご紹介する「アートの本棚」を開催しています。今回のテーマは、『フォトモンタージュとコラージュの作家たち』。
会期：2007年1月20日（土）〜3月25日（日）　※水曜日休館
会場：彩都メディア図書館特設コーナー

冬のワークショップ

図書館ではものづくりの楽しさを体感していただく1日体験ワークショップを年に数回開催しています。2月から3月にかけての内容はホームページでご確認下さい。（要予約・先着順）

お申し込み・お問い合わせ
〒565-0826　大阪府吹田市千里万博公園1-1万博記念ビル1F
Tel.06-6816-3316　Fax.06-6816-3320
E-mail.library@saito-medialib.org
URL.http://www.saito-medialib.org

From　NPO法人芸術資源開発機構（ARDA）

ARDAでは、「トヨタ・アートマネージメントフォーラム2007〜なぜ、いまアートなの？　アートの力、アートの社会的価値を考える〜」で分科会をコーディネートします。

分科会【A】「高齢化社会とアート環境　ーシルバーパワーが社会を変えるー」

高齢者社会へ向けてアートをとりまく環境について、異なった立場の3パネリストが、事例を含めた現状について報告します。その後、参加者とフリーディスカッションを行います。
司会：並河恵美子（NPO法人ARDA代表）
「高齢者施設へアート・デリバリー」
三ツ木紀英（NPO法人ARDA／アートプロデューサー）
「高齢者のミュージアム時間」
稲庭彩和子（神奈川県立近代美術館学芸員）
「ユニバーサルデザインが社会を変える」
川原啓嗣（国際ユニヴァーサルデザイン協議会専務理事）

日時：2007年3月3日（土）10：30−18：30
会場：トヨタ自動車東京本社
参加費：1,000円（全体参加費として）

［お申し込み先］
ネットTAM運営会事務局（[社]企業メセナ協議会内）
トヨタ・アートマネジメントフォーラム2007係
Fax.03-3213-3397
E-mail.kmk@mecenat.or.jp
フォーラム公式サイト　http://www.nettam.jp/forum07/

お問い合わせ
特定営利活動法人NPO芸術資源開発機構（ARDA）
〒168-0082 東京都杉並区久我山5-23-2
Tel.03-3334-7876　Fax.03-3334-7876
E-mail.infoarda@arda.jp
URL.http://www.arda.jp/

From　財団法人たんぽぽの家

アクセスアーツフォーラム

障害のある人を含め、誰もがアートを通して人とかかわり、社会に参加していくことの意義や方法について考えます。
■福岡フォーラム／2月10日（土）　あじびホール
■仙台フォーラム／2月18日（日）　宮城県美術館講堂
■大阪フォーラム／2月25日（日）　應典院本堂ホール
■東京フォーラム／3月10日（土）　MY PLAZAホール
■愛知フォーラム／3月18日（日）　社会福祉法人むそうアートスクエア

哲学する写真　ー写真を通してケアについて考えるー

人生の物語を記録した写真をみながら、自分の記憶や物語をひもとき、ケアについてじっくりと話しあいます。
共催：アートミーツケア学会／應典院寺町倶楽部／
NPO法人彩都メディア図書館
会場：應典院研修室B
参加費：一般1,000円／学生500円　※共催団体の会員は無料

第1回「家族の風景　ーコミュニティと個をつむぐ写真の力ー」

日時：2007年2月27日（火）18：30〜20：30
勇崎哲史　プランナー／写真家／彩都IMI大学院スクール事務局長
鳥海直美　千里金蘭大学人間社会学部講師／社会福祉士

第2回「生老病死へのまなざし」

日時：2007年3月6日（火）18：30〜20：30
綾　智佳　ギャラリーディレクター／The Third Gallery Aya Director
播磨靖夫　財団法人たんぽぽの家理事長／アートミーツケア学会常務理事

第3回「写真を通したセルフケア　ー撮る・見る・話す・聴くことからはじまる私への旅ー」

日時：2007年3月12日（月）18：30〜20：30
糸川祥子　写真家／写真表現大学講師
中西美穂　NPO法人アーツアポリア代表

お申し込み・お問い合わせ
財団法人たんぽぽの家
〒630-8044　奈良市六条西3-25-4
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501
E-mail.tanpopo@popo.or.jp
URL.http://www.popo.or.jp

アートミーツケア学会　入会のご案内

会員を募集しています

アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1. 大会の開催
   講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。
2. 調査研究の推進
   「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、テーマごとに研究部会を設け、アートとケアに関する調査研究を推進します。
3. 学会誌の発行
   アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を年1回発行します。
4. ニュースレターの発行
   日本や海外における新しい情報を掲載したニューレターを年に4回発行します。
5. フォーラム、シンポジウムの開催
   特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。
6. プログラムの開発、プロジェクトの実施
   ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。
7. 国際交流の推進
   アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

会員種類・年会費

□個人会員　一般10,000円　学生5,000円
□賛助会員　30,000円

申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。
   入金先　アートミーツケア学会
   口座番号　00920-4-252135
2. 入会申込書に必要事項を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。
3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

役　員（敬称略）

□会長	鷲田清一	（大阪大学教授、副学長）
□副会長	畑　祥雄	（関西学院大学教授）
□常務理事	播磨靖夫	（財団法人たんぽぽの家理事長）
□理事	秋田光彦	（大蓮寺住職、應典院主幹）
理事	片井　修	（京都大学情報学研究科教授）
理事	グロッセ世津子	（有限会社みどりのゆび代表）
理事	塩瀬隆之	（京都大学大学院情報学研究科助手）
理事	関口怜子	（ハート＆アート空間Be-I代表）
理事	ブルース・ダーリング	（九州保健福祉大学教授）
理事	銅金裕司	（メディアアーティスト）
理事	鳥海直美	（千里金蘭大学人間社会学部人間社会学科専任講師）
理事	中川　真	（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
理事	並河恵美子	（NPO法人芸術資源開発機構代表）
理事	本間直樹	（大阪大学講師）
理事	的場政樹	（医療法人直志会袋田病院院長）
理事	見寺貞子	（神戸芸術工科大学教授）
理事	森口ゆたか	（NPO法人アーツ・プロジェクト代表）
理事	森田ゆかり	（金城大学短期大学部講師）
理事	山口悦子	（大阪市立大学大学院医学研究科発達小児医学病院講師）
理事	横川善正	（金沢美術工芸大学教授）
□監事	太田好泰	エイブル・アート・ジャパン事務局長
監事	三浦久子	株式会社エイジレスラボラトリー会長

募集しています！

□**ニュースレターのネーミング募集**
このニュースレターの愛称を募集します。2月末日〆切です。

□**ボランティア募集**
事務局では、ニュースレターの編集や取材などに協力いただける方を募集しています。興味のある方はご連絡を。

□この他、ニュースレターで取り上げてほしい特集や記事などについて事務局までご意見をお寄せ下さい。お待ちしています。

アートミーツケア学会ニュースレター

Vol.1　2007年1月20日発行

発行　アートミーツケア学会
〒630-8044　奈良市六条西3-25-4　財団法人たんぽぽの家内
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501
E-mail.art-care@popo.or.jp
発行部数　2,000部